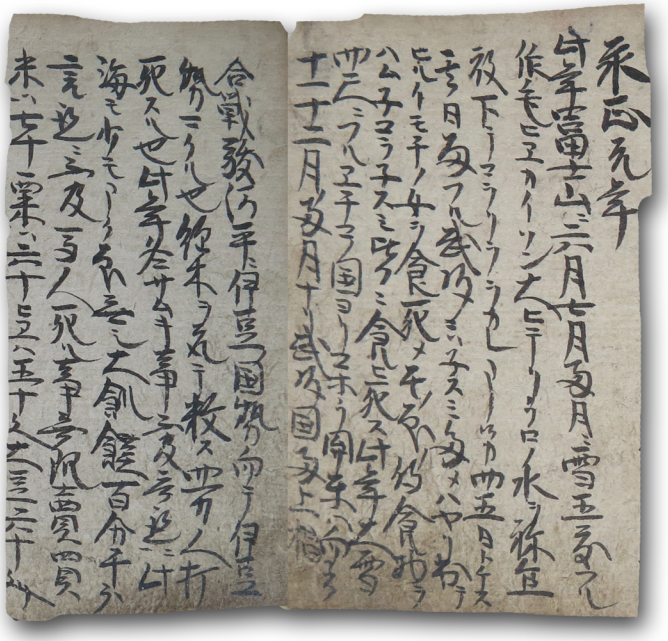
勝山記
冨士御室淺間神社寶物

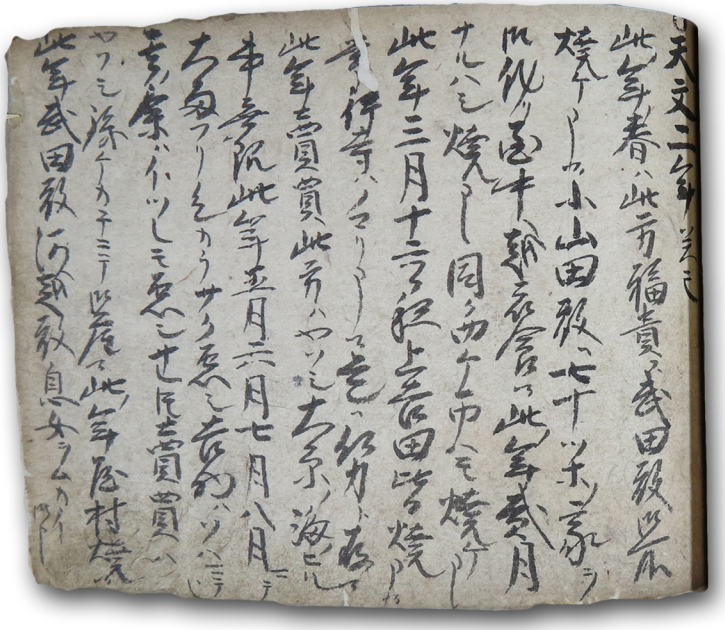


永正元年
此年富士山ニ六月七月両月ニ雪五度フル
作毛ヒエカイソン、大ヒテリウロノ水ヲ祢宜
殿下テコヨリヲ、ヨカレ申候カ、四、五日トケス
其ノ日雨フル、武州ニハ子スミ多クハ、ハヤリ出テ
ヒルイモチノ女ヲ食死ハ、其ノ処ノ備食物ヲ
ハム、子コヨ子スミ皆食ヒ死ス、此年大雪
四尺ニフルヱチコノ国ヨリコホウ関東ヘ向玉フ、
十一、十二月ノ両月ナリ、武蔵国両上楫
合戦駿河平ニ伊豆ノ国勢向テ伊豆
勢マクル也、経木ヲ取テ数ス、四万人打
死スル也、此年冬サムキ事不及言説此
海モ少モアク処無シ、大飢饉、百分千分
言説ニ不及、馬人死ル事無限、賣買ハ
米ハ七十、粟ハ六十、ヒヱハ五十文大豆六十文
モミ六十文

2014年の富士五湖地方記録的な大雪の日

『勝山記』によると、大雪の記録は康暦元年(１３７９)大雪諸国咳病ス、永享５年(１４３３)霜(月)廿六日大雪フリ大木折ラル、永正元年(１５０４)此年富士山ニ六月七月両月二雪五度フル、此年大雪四尺ニフル、永正７年(１５１０)去年極月廿五日ヨリ大雪降候、深サ四尺フル、鹿力死--事不、永禄３年(１５６０)二月廿日ニ大雪フリ、ツツカイニハ何モ不入候得共鹿鳥無残被取申事無限候、永禄４年(１５６１)正月二月大雪降積リ薪ニツマル事無料間候、などとあります。

国中の塩山向獄禅庵小年代記の記載では天文７年(１５３８)に１ｍ５０ｃｍ余りの積雪とあり、平成２６年(２０１４)の積雪も珍しいことでは無いかもしれません。



天文二年葵巳
此ノ年ノ春ハ此方福貴ス、武田殿御所
焼ケ申候、小山田殿ハ七十ツホノ家ヲ
御作リ国中ヘ越被食候、此ノ年二月
サルハシ焼申候、同ク四ケ市ハモ焼ケ申候
此年三月十六日夜上吉田皆焼申候
常行寺ハノコリ申候、是ハ仏力ト存候
此年賣買此方ハヤソシ、大原ノ海ノヒル
事無限、此年五月六月七月八月マテ
大雨フリ候テカウサク悪シ、吉物ハソハニテ
其ノ余ハイツレモ悪シ、サレトモ賣買ハ
ヤソシ、銭ケカチニテ御座候テ此ノ年屋村焼候
此年武田殿河越殿息女ヲムカイ
御申候

2013年2～3月河口湖渇水

六角堂

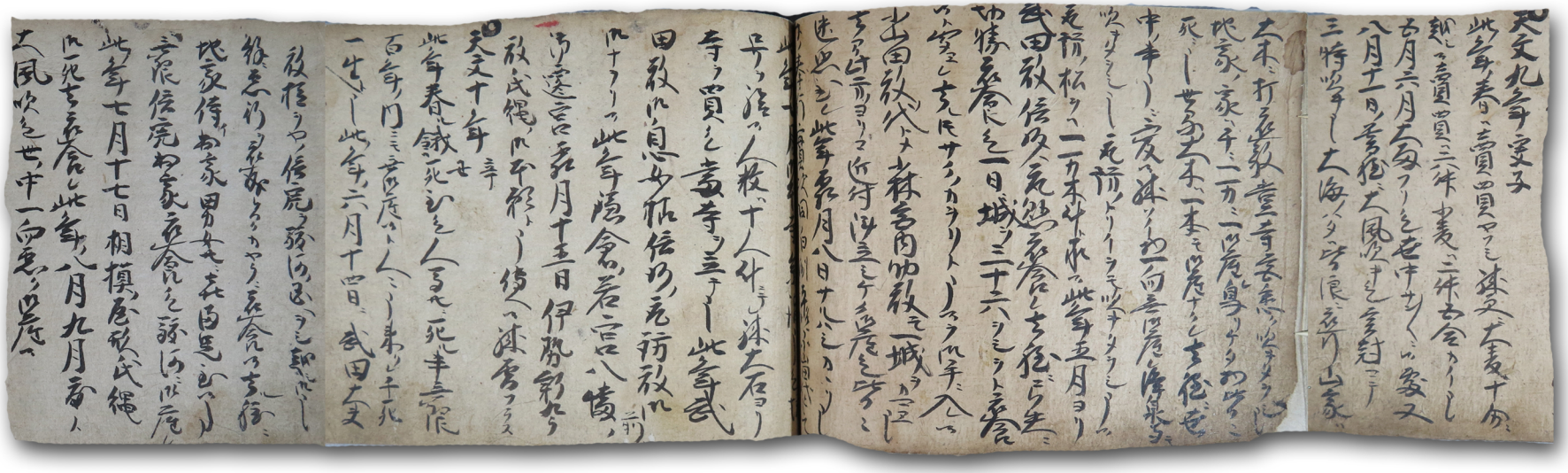
うの島

天文2年(1533)の春は人びとの暮らし向きは安泰でした。

しかしこの年は各地に火事が多発し、武田館をはじめ郡内では2月に猿橋が燃上。続いて四日市場、谷村に火事が発生。3月16日夜の上吉田の大火は、常行寺を残し全焼しました。また、河口湖は干魃で干上がり、鵜の島へ徒歩で渡ることができたといいます。この年の郡内は、火事、干魃、大雨と、ご難続きの1年でした。

ちなみに、河口湖が渇水する現象は珍しいことでは無く、『勝山記』でも度々記載されています。

天文9年と10年(1540・1541)は甲斐の人々にとって災難の年でした。5月6月の大雨に始まり、秋にかけて巨大台風来襲で大災害をもたらし、ついに翌年大飢饉となり、北条・今川からも侵略が激しくなります。またこの年、武田晴信(信玄)ら家臣はこれらに対して無策だった武田信虎(信玄父)を今川義元と面会したのち無血追放します。ちなみに飢饉の記録はたくさんあり、これ以前にも『勝山記』には1473、1490、1495、1505、1515、1518、1523、1534、1536～37年とあり、これらが原因で戦国時代が始まったと言われています。



天文九年庚子

此ノ年ノ春ハ賣買ヤソシ、殊更ニ大麦十分ニ
越シ候、賣買ハ六升小麦ハ二升五合カイ申候
五月六月大雨フリ候テ世中サンサンニ候處又
八月十一日ノ暮程ニ大風吹キ候テ亥尅マテ
三時吹キ申候、大海ノハタハ皆浪ニ被引、山家ハ
大木ニ打被殺、堂寺、宮悉ク吹キタヨシ申候
地家ノ家ハ千二一、万二一、御座候、鳥リケタ物皆々
死ニ申候、世間ノ大木ハ一本モ御座ナク候、去程ニ世
中ノ事申ニ不及候、殊ソイ物一向無御座候、浄泉寺
吹キタヨシ申候、諏訪ノトリイヨモ吹キタヨシ申候
取訪ノ松ヲハ一万本計ト承候、此年五月ヨリ
武田殿信州ヘ取懸被食候、去程ニ弓矢ニ
切勝被食候テ、一日ニ城ヲ三十六、ヨシヲト被食
候ト聞エ候、去レモサクノカヲリト申候ヲ御手ニ入候
小山田殿ノ代トハ、小林宮内助殿モ一城ヲカマエ申候
去間此方ノヨリコ、近時陣立シケク御座候テ皆々
迷惑至候、此年霜月八日サルハシカカリ申候
「下ノ奉行實汲同白洲平治郎、小山田代として」
此ノ年七月御本寺ヘ参詣申候テ坊
号ヲ給候、人數ハ十人計ニテ候、殊大石ヨリ
寺ヲ買候テ當寺ヲ立テ申候、此年武
田殿御息女様信州ノ取訪殿御前ニ
御ナヲリ候、此年鎌倉ノ若宮八幡ノ
御遷宮、霜月十五日、伊勢新九郎
殿氏縄ノ御本願ト申傳ヘ候、殊雪フラス
天文十年　辛丑
此年春ル餓死至候テ、人馬共ニ死ル事無限
百年ノ内ニモ無御座候ト人々申来リ候、千死
一生ト申候、此ノ年ノ六月十四日ニ、武田大夫
殿様ヲヤノ信虎ヲ駿河ノ国ヘ、ヨシ越シ御申候、
餘ニ悪行ヲ被成候間、カヤウニ被食候、去ル程ニ
地家侍イ、出家男女共ニ喜、満足至候事
無限、信虎出家被食候テ、駿河ニ御座候、
此ノ年七月十七日相模ノ屋形氏縄
御死去被食候、此年ノ八月九月度々
大風吹候テ世ノ中一向悪ク御座候

昭和30年頃の河口湖 富士レークホテル所蔵

永禄6年(1563)、7月22日に降り始めた雨は8月2日まで降り、新倉の山沢の大出水は田畑を押し流し、河口湖の大小の家々は高台の家を残して水没しました。かろうじて難をまぬがれたのは船津村の円通寺と小林尾張守の屋敷ぐらいで、小立村の常在寺も水の中に孤立状態となりました。

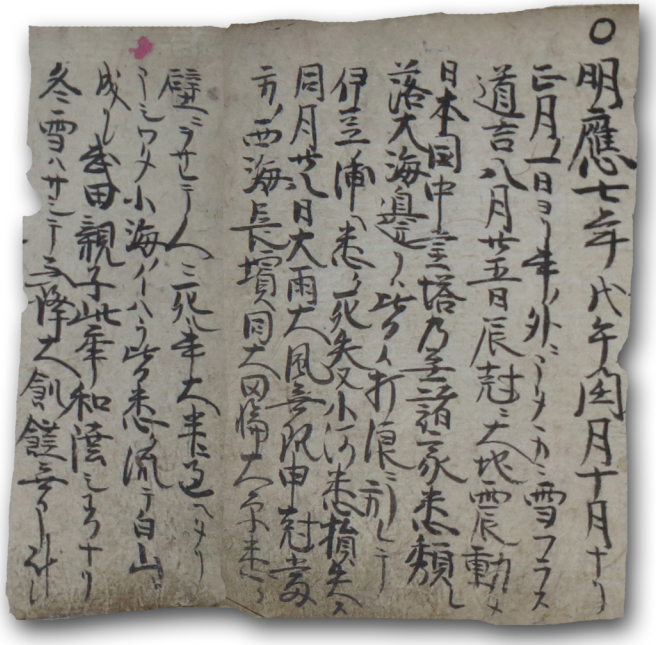
ここで紹介する画像は**明治43年の河口湖大洪水**の写真(小佐野家所蔵)を特殊な方法でカラー化したものです。

甲斐國志稿本の『勝山記』により補記

永禄五壬戌　正月一日モ戌ノ日ツ、ケテ三年戌ノ日ナリ、三年ナカラ世ノ中ハ吉シアル中ニモイ子(稲)ハ皆損ナリ、此年ノ十月ヨリ霜月雪月迄日テリナリ世ノ中モ十分ナリ。

永禄六癸亥　正月一日庚辰此年ノ五月大風吹大麥ヲ悉吹チラス、乍去大麥ノ賣買壹斗二升、小麥ハ五升賣申候、去程ニ其七月廿二日ヨリ大雨フリ始メ八月二日迄、荒蔵之山澤水大ニ出候テ晝夜廿日出候テ田畠悉流シ候、去程ニ田岡チカイ申事無限、大原之事ハ大舟津ノ道下ノクホマテ海ニ成リ申候、大小舘小之舘悉ク海ニ成リ申候得共、常在寺計何方ヘモ不被罷出候、小舟津圓通寺計残リ申候、其上小林尾張守殿計リ海ニ成リ不申候、大小舘ハ塚ノ上ノ屋敷計居残申候、此年ノ世ノ中言語同断ニ惡ク候得共賣買ハ安シ。

明応七年戊午閏月十月ナリ、
正月ノ一日ヨリ事ノ外ニ、アタタカニ雪フラス
道吉、八月廿五日辰尅ニ大地震動〆、
日本国中堂塔乃至諸家悉頽レ
落大海邊リハ皆々打浪ニ引レテ
伊豆ノ浦へ悉ク死失又小河悉損失ス
同月廿八日、大雨大風無限、申尅當
方ノ西海、長濱同大田輪、大原悉ク
壁ニヲサレテ人々死ル事大半ニ過ヘタリ、
アシワタ、小海ノイハウ皆悉ク流テ白山ト
成申候、武田親子此季和睦シ玉フナリ、
冬雪ハサシテ不降、大飢饉無申計候



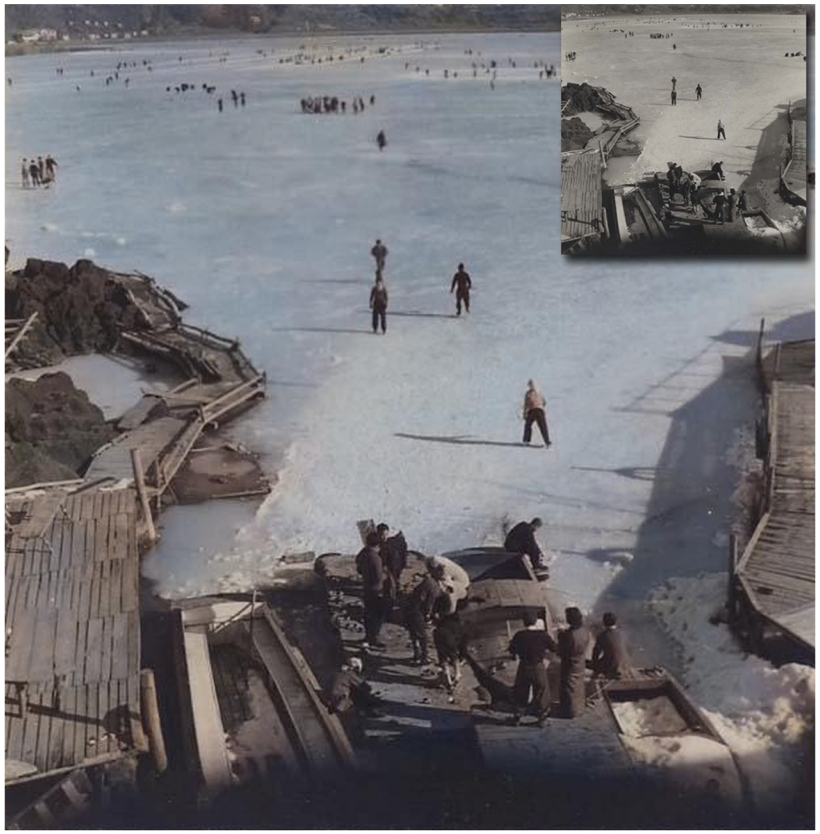
明応七年8月25日辰尅(1498年9月11日午前8時頃)、東海道を中心にマグニチュード8．6を記録する大きな地震がありました。日本各地の記録でも駿河湾沿岸で8ｍの津波、伊勢志摩でも6～10ｍの津波があり大きな被害を出しました。

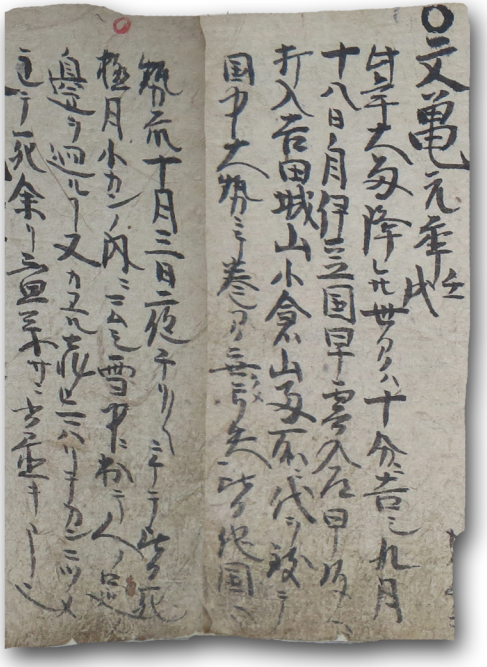
『勝山記』では、日本国中堂塔乃至（ないし）、諸家悉（ことごとく）頽（くず）レ落、大海辺リハ皆々打浪（津波）ニ引レテ伊豆ノ浦へ悉ク死失、又小河悉損失ス。3日後の28日、午後6時ころ地震とともに大風雨が郡内地方を襲い、西海、長浜、大田輪（和）、大原は山津波のため全滅状態となり、多くの人が死にました。ことに足和田、小海の巌は大崩れを起こし、山の土砂が流れてしまい、白山となりました。

本町通り 一品堂書店所蔵

文亀元年(1501)、は大雨でしたが豊作。9月、伊豆の北条早雲が郡内に攻め込みましたが、甲州勢は北条軍を撃退しました。

12月、厳寒の雪の中にマムシ（毒蛇）が出て、人の足の回りをめぐり歩いたり、蛙がとびまわり寒さのために凍死しました。余程珍しかったのか記録主体の『勝山記』の中で文末に、「あまりの不思議さに書きとめておく」と、筆者もびっくりしています。





文亀元年壬戌
此年大雨降共世間ハ十分ニ吉シ、九月
十八日自伊豆国早雲入道甲州へ
打入、吉田城山、小倉山両所ニ代ヲ致テ
国中大勢ニテ巻間、無弓矢皆他国へ
勢衆十月三日夜チリチリニケテ皆死、
極月小カンノ内ニマムシ雪中ニ出テ人ノ足
邊ヲ廻ル事、又カヱル飛ヒマハリテカンニツメ
ラレテ死、余リ不思義サニ書置申也

富士レークホテルの所蔵画像を特殊な方法でカラー化してあります。

『勝山記』は法華宗浄蓮寺の住僧代々が書き継いだものと言われる歴史資料で、勝山冨士御室浅間神社(北口浅間上社)に「門外不出」として残されている貴重な書物です。

『勝山記』の内容は、師安元年(564)から永禄二年(1559)に及び、武田家をとり巻く周辺国の実情はもちろん、郡内領民の暮らしぶりや世相などが克明に記録されている中世史研究の一級史料です。

今回のカレンダー制作にあたり『勝山記』の内容を広め、世の中に役立てて欲しいという思いを受け、富士五湖TVでお預かりしているオリジナル画像を活用させて頂きました。